
不良女子と高い【鼻】 (後編)

プライア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良女子と高い【鼻】（後編）

【Nコード】

N3549H

【作者名】

プライア

【あらすじ】

ツレである沙織の鼻を目の前で折られ、さらに文自身も鼻をパンチで打ち抜かれてしまうことで、鼻が折れることへの恐怖が募る。そして、諸角の奇襲により完全に油断していた文はどうとう相手の思惑通りその自慢の高い鼻を彼氏の目の前で折られてしまう。想像していた以上の激痛に頭が真っ白になっていく文。だが、これは地獄の始まりにすぎなかった。暴力的な描写が苦手な人にはこの小説を読むことをお薦め出来ません。

「油断したな、目崎！今度こそ終わりだ！」

（折角助かったと思ったのに。）

ブオオオオオツ

（こんなことって・・・嫌あ。）

「ん!? 文? 文ああああ! ?」

ガキ
イ
イ
イ
イ
イ
ツ

振り返ったヒロキが目にしたのは、自分の彼女、目崎文がバイクに乗った諸角の鉄パイプが鼻にぶちこまれた姿だった。文の鼻から鈍く重い音が鳴り響く。それは沙織の時よりも一層大きく聞こえた。その音をヒロキは耳にしてしまった。その音はまぎれもなく、愛する彼女、目崎文の鼻がたたき折られた音だった。

「あがあああああああああああああああああああああああ
あああああつ!!!!!!!!!!!!」

ブ
オ
ツ

ゴロゴロゴロ

文は近所中に聞こえるような大声で断末魔のような悲鳴を上げた。
文の体は吹っ飛ばされ近くの河原の坂を転げ落ちていった。

ドサツ

ドバドバドバドバ

「は・・ぐ・・う・・。」

文には自分の姿は見えない。しかし、文は自分が今どういう姿をさらしているかは想像出来た。それはさっきの沙織が鼻を折られる姿を見ていたからだ。鼻はぐんにやりと歪み、ドス黒い鼻血がドバドバと流れている。口の中もその鼻血の味がする。文の想像は当たっていた。ただ沙織の時と全然違うのは、バイクで勢いのついた鉄パイプを鼻骨にぶちこまれたということだ。沙織が味わった痛みとも違う、さっき鼻にパンチを入られた時の痛みとも違う。もっと激しく想像以上の痛み、それは「激痛」という言葉にさえも形容し難いものだった。

(あ・・や・・の・・は・・な・・が・・)

ドバドバドバ

(お・・れ・・た・・)

タッタッタッタ

諸角はぶっ倒れている文の近くに近づいた。そこには鉄パイプによって見事に鼻をたたき折られ鼻血を流し続けている文の姿があった。諸角が一番期待していた文の姿だった。

「ははは！無様な目崎。はっきりと聞こえたぞ、お前の鼻が折れた音をな。どうだ宣言通りにお前の自慢にしていた高鼻をみんなの

前でたたき折られる気分は。すっかりひしゃげちまったな、お前の鼻。」

文の鼻はすっかりグニャッと歪んでしまった。鼻筋が折れまがっているのだ。

「は・・・はな・・・が・・・あ・・・っ・・・あ・・・ぶ・・・う・・・」

ドスッ

「!!」

「座られたらお前はもう動けないだろ。さーて、他の奴らへの見せしめにリーダーのお前の鼻をバキバキに折ってやるよ。」

「!!」

諸角は文の上に馬乗りし、拳をかまえた。文はもう逃げられなくなった。

「やめ・・・て・・・え・・・」

「ばーか！なさない奴め！霜月高校に逆らったのがお前の運のつきだ。うちの高校に逆らわなければ自慢の高鼻は折られずのすんだのにな。安心しろ、殺しはしない。ただ死なない程度に徹底的に鼻をバキバキにしてやる。」

文の力ない命乞いは当然のことながら諸角が聞くはずがなかった。

文はそれで呻き続けるしかなかった。

「ひ・・・ろ・・・き・・・い・・・」

文は力なくヒロキの名前を呼んだ。しかし、その声は当然ながら聞こえるはずもなかった。

「名前を読んでも無駄だ。お前の仲間は待機させていたうちの予備の連中に相手させている。へとへとに疲れているお前の仲間がうちの予備の連中を倒せると思えないがな。」

「ひ・・・ど・・・い・・・」

「まあ彼氏ぐらいになら合わせてやってもいいぞ。おい！」

「え．．？」

諸角の合図で現れたのは諸角の手下とボコボコにされたヒロキの姿だった。ヒロキは集団に一気にやられてもう戦う力も残ってなかった。

「ひ．．ろ．き．．．」

「文．．お前．．その顔．．」

ヒロキは鼻が完全に折れ曲がったしまった文の顔を見てショックを受けた。さっきまで健全だった文の鼻のひどい有様に言葉をなくした。

「お前にはこれからお前の彼女の鼻がさらにバキバキになっていく様をじっくり堪能させてやるよ。」

「！！．．やめろ！」

「ひ．．ろ．．き．．たす．．け．．て．．え．．．」

文のうめき声もむなくヒロキはどうすることも出来ない。そして今度こそ諸角は拳をかまえた。

「目崎文。お前のその高かった鼻、時間をかけてきれいにぺしゃんこにしてやるよ。」

「あ．．あ．．や．．め．．．．．て．．．え．．．」

「地獄の苦痛味わいな！オラ！」

ブオツ

（あやの．．は．．な．．．．．もう．．だ．．め．．．
ば．．き．．ば．．き．．．．．に．．．お．．ら．．れ．．る．
．う．．．．．

．．．．いやあああああああ！！！）

バキイツ

(・・・ああ!)

バキバキバキバキバキ

「きゃあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

バキバキバキバキバキ

諸角は容赦なく左、右と交互に文の鼻にパンチを打ち込み始めた。
豪快に音を立てて文の鼻はどんどん折れていく。

「あうううううっ・・・ぶ・・・ぶうっ・・・」

始め反射的に発せられた悲鳴はすぐ小さくなり、文は力なく呻いた。
ヒロキの目の前でどんどん文の鼻はバキバキにされていく。

「文・・・くそお・・・」

バキバキバキバキ

ブシャアアアッ

(なに・・・これ・・・は・・・な・・・い・・・た・・・す・・・
ぎ・・・る・・・)

バキバキバキバキ

(・・・は・・・な・・・ど・・・ん・・・お・・・れ・・・
て・・・い・・・く・・・)

バキバキバキ

(・・・お・・・れ・・・る・・・は・・・な・・・が・・・お・・・
れ・・・る・・・う・・・)

文の鼻はみるみるうちにバキバキにされていき、鼻先は丸みを帯び
つぶれはじめた。鉄パイプで完全にたたき折られた鼻骨も完全に破
壊され、高さは失われてしまった。鼻筋もどんどん曲がっていく。

傲慢の高鼻はどんどんつぶれていく。

バキバキバキ

「あ．．．ぶ．．．う．．．っ．．．」

どんだん文の鼻は横に潰れていく。鼻筋は陥没していき高い鼻だった分、普通の人より余計に横につぶれ広がっていく。諸角が「きれいにぺしゃんこにする」と公言した通り均等に文の鼻にパンチを叩きこんでいき水平になるよう鼻を平らになるようにつぶしていく。

「ああ．．．文の鼻がつぶれていく．．．」

バキバキバキ

(ひ．．．ろ．．．き．．．に．．．み．．．ら．．．れ．．．て．．．
く．．．．．あ．．．や．．．の．．．は．．．な．．．つぶ．．．れ．．．
．．．て．．．．．い．．．く．．．の．．．ひろ．．．き．．．に．．．み．．．
ら．．．れ．．．る．．．う．．．)

グシャアッ

「!!」

グシャグシャグシャ

ドバアアアアアアア

「は．．．な．．．が．．．．．あ．．．．．」

自分の鼻がつぶれていく感覚が分かるのに何も出来ない。文はそんなどうしようもない無力感をみじめな顔をさらしながら、弱々しい声で発することしか出来ない。

「い．．．た．．．い．．．い．．．い．．．」

グシャグシャグシャ

「あ．．．や．．．の．．．．．」

グシャグシャグシャ

「は．．．な．．．が．．．あ．．．．．」

鼻筋は完全に陥没し、すっかり横に広げてつぶれてしまった。完全に文の高鼻はその面影もないくらいに「ぺしゃんこ」にされてしまった。

「文の鼻が．．あの文の高い鼻が．．．ぺしゃんこになってしまった．．．」

グシャグシャグシャ

そして・・・

グシャアッ

(は・・・な・・・が・・・お・・・れ・・・た

・・・は・・・な・・・が・・・つ・・・ぶ・・・れ・・・た・・・

・・・は・・・な・・・が・・・ぺ・・・し・・・や・・・ん・・・こ・・・

・・・に・・・な・・・った・・・

・・・あ・・・や・・・の・・・は・・・な・・・ち・・・や・・・

・・・だ・・・め・・・に・・・な・・・っ・・・ち・・・や・・・

・・・っ・・・た・・・)

「・・・あ・・・う・・・う・・・」

ブシャアアアッ

長時間にわたる文の鼻責は終わった。高さをなくし、真っ平らになった文の鼻はきれいにぺしゃんこの形に整えられていた。

「これ以上やると死ぬな！でも鼻はぺしゃんこにしてやったぜ！どうだ自慢の高鼻を完全にぺしゃんこにされた屈辱は！？」

「あ・・・う・・・」

文は屈辱に震えていた。しかし、その文の中には恐怖心もあった。全く手を出すことも出来ずただ鼻をバキバキにされていた。なぜ諸角を相手にしたのだろうという後悔をも芽生えてきた。文の心は

折れてしまった。

(も・・・う・・・だ・・・め・・・・・・あ・・・)

ジワジワ

「ん？何かしょんべん臭くないか？」

「諸角さん見て下さい！目崎の奴しょんべんもらしてますよ！」

(ああ・・・)

シャーーーーーッ

「文・・・。」

文の中で心が折れてしまった瞬間、自然と文はおしっこをもらしていった。無意識に文は失禁した。尿が漏れていくことには気づいたがそれを恥ずかしむ気持ちも起こらなかった。精神的にも文は完全に敗北した。

「ははおもらしか目崎！うちの高校に逆らわなければこんなみじめな顔にされずにすんだのにな。折角の高い鼻だったのに。」

「あ・・・ぶ・・・う・・・。」

パンパン

「おい！みんな！決着はついた！目崎は終わった！自慢の高鼻を完全たたきつぶしたぞ！」

「わあああああ！！！」

「え！？」

「嘘！文さん！？」

諸角の勝利の叫びに鳴浜高校も霜月高校も続々とその場に集まってきた。そしてそこには確かに鼻をぺしゃんこにされてしまった文の姿があった。

「文さん・・・」

ドクドクドク

「・・・。。。」

文はほとんど頭が真っ白の状態で、声を出せない。そして手下はその情けない文の姿を前にして呆然としていた。

「鳴浜高校は終わったな〜どうだ！お前らのボスが鼻をバキバキに

折られた上にぺしゃんこにされて地面に横たわっている姿は！」

「ひどい・・あんなに高い鼻してたのに。」

「ばーか！高い鼻してるから狙うんだろ。鼻は高ければ高いほど折れやすいし、痛みも激しいんだよ。だから私はこの女の鼻をバキバキにした。うめき声を上げながら鼻をバキバキにされて、みじめだったな。」

そして諸角はヒロキの方を見た。

「おい！彼氏！お前の彼女の鼻どうよ？傑作だろ？」

「文・・文・・文・・」

ヒロキはただ泣き崩れていた。そして諸角は立ち上がって携帯を取り出した。カメラを文の顔に向けシャッターを押した。

ピロリロリーン

「これでこの女の鼻が無様につぶれた顔は撮った。この写真を色んなところに回してうちが勝ったことを証明するぞ。」

沈み込む鳴浜高校と対照的に、霜月高校は湧き上がった。喧嘩は霜月高校の勝利で終わった。文の完全敗北で終わった。一撃で鼻を折られ、心も折れてしまい、鼻をバキバキにされぺしゃんこにされてしまった。

文の鼻。中学まではそうでなかったのに。中学時代から成長していく中でどんどん高くなってきた。高い鼻は自慢だった。みんなから羨ましがられた。喧嘩の時に狙われることがなかったわけではないが、そんな大きなダメージも受けずに今まで乗り越えてきたはずだった。今日までは。

「うう・・ああ・・」

「文さん！？」

「文！？」

「あ・・・や・・・の・・・は・・・な・・・
・・・が・・・あ・・・」

シャーシャーッ

文は最後に無意識に嘆きのうめき声を上げた。そしてもう一度失禁した。鳴浜高校不良女子ボス目崎文の惨めな最後だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3549h/>

不良女子と高い【鼻】（後編）

2010年10月14日02時37分発行